

名前： 箱山 富美子

略歴： 1982－85年 ILO（国際労働機構）ジュネーブ本部で、アソシエート・エキスパートとして Office for Women Workers' Questions 勤務。

1985－2004年ユニセフ職員として、ラオス、アルジェリア、スーダン、モーリタニア、コソボ事務所に勤務。プログラム・オフィサーや副代表として、教育プログラムや女性プログラムを立案、執行、モニターし、また事務所のプログラム全般を統括した。

ラオスでは教員養成プログラムや小学校教育、マイノリティ女性の識字教育で言語と政治の関わりに気づかされた。アルジェリアではプログラムの他、人事等、事務所全般の業務も担当した。スーダンでは紛争下の教育プログラム、教科書作り、FGMなどに、国、地方行政、NGOと携わった。またミャンマーでグラミン-バンクを調査し、スーダンから転勤したモーリタニアでも女性NGOとともに同様のマイクロクレジット組織を作り上げた。モーリタニアでは国連の機構変革の最中、他の国際機関や、国際・地元NGO、また地元政府や地方行政機関との調整が主な任務で、栄養、保健、緊急支援関連が多かった。コソボでは紛争直後の大規模な復興支援プログラムを担当。2002年から2003年全般にかけてのコソボの政治、経済、社会の変化にプロジェクトがどう影響され、また対処してきたか、プロジェクトの進展はどうだったか、コソボの状況の好転にどう影響を与えたか、ボトルネックはどこか、どう克服するか等について分析、報告した。

2004年から7年間、北海道の藤女子大学教授として、国際理解教育や異文化間コミュニケーションの授業を担当した。北海道大学や総合地球研究所との共同研究：農村サニテーション・プロジェクトで、2009年から2017年までブルキナファソやインドネシアでフィールド調査を年数回行った。またJICAの西アフリカ農村飲料水管理研修を2007年に立ち上げ、毎年フランス語で講師を勤め、今に至る。

元東京外国語大学、明治学院大学、専修大学、青山学院大学非常勤講師。

その他コメント： 卒論やパリ大学の修士論文では源氏物語とフランス文学の比較文学を扱い、その後ジュネーブ大学のDEAで教育学を専攻する、という国際職員としては異例の経歴を持つ。